

「模擬原爆」 トシちゃん奪った

朝日新聞 13 日の表題記事から。今も暮らす街に落とされた 1 発の爆弾について、ある事実を知ったのは、戦後 50 年以上も経ってから。とてつもない怒りがこみ上げた。姉のように慕った「トシちゃん」を奪ったのは「練習」だったのか、と。1945 年 7 月 26 日朝。国民学校の教員だった龍野繁子さん (98) =大阪市東住吉区=は生徒を動員先の町工場へ引率した。戦況の悪化で資材の入荷はなく、この日も作業はなかった。工場長から「今日は勉強しててください」と言われ、隣の部屋に移った。10 分後。午前 9 時 26 分。「バリバリバリ」「ドスン」。大きな衝撃音が響いた。直径 1 尺ほどの大きな岩が屋根を突き破り、さっきまで居た 2 階の床を破壊し、1 階に落ちた。落とされた爆弾は 1 発だけだったが、周辺では 7 人が犠牲になった。そのうちの 1 人がトシちゃん。姉の親友だった。戦後、あの爆弾のことは記憶の奥底にしまい込んだ。だが、90 年代前半にその正体が明らかになった。「模擬原爆」 第 2 次世界大戦末期、米軍が訓練のために日本各地に投下した爆弾。長崎に落とされた原爆とほぼ同じ 4.5 トンの重さ、同じ形状で、火薬を詰めたものだった。黄色やオレンジ色に塗られたその見た目から「パンプキン」と呼ばれた。広島、長崎への原爆投下の前後、全国で 49 発が落とされ、約 400 人が死亡したとされている。その一つが、東住吉に落とされた。龍野さんは言う。「米軍にとっては練習だけど、落とされる側は練習じゃない。それで何人亡くなったことか。人の命をなんだと思っているんだ」

『週刊金曜日』8 月 4 日号「日本に落とされた 49 発の模擬原爆」にも、冒頭で龍野さんも参加した模擬原爆での犠牲者の追悼式が紹介されている。模擬原爆投下については戦後長らく知られることがなかったが、愛知県の市民団体がその実相を突き止めた。市民団体

「春日井の戦争を記録する会」の金子力さん(72 歳)が、実相解明の経緯を語った。金子さんは 1975 年、就職して愛知県春日井市の中学校に教員として赴任した。たまたまその中学校の敷地が、元の軍需工場、鳥居松製造所の跡地の一部だった。この軍需工場が、敗戦の前日である 45 年 8 月 14 日に B29 による空襲を受けた。4 発の大型爆弾が着弾して 7 人が死亡、多くの民家が焼失した。「あと 1 日戦争が早く終わってれば、うちの家は燃えなかったのに」といった「1 日」の差を恨む声が遺族や被災者から聞こえてきた。金子さんらにより 8 月 14 日の春日井空襲の謎を解明する活動が続けられ、模擬原爆の発見につながる。じつは、金子さんからは調査についてお聞きしたことがある。1979 年に名古屋市立女子短大に就職したが、その図書館で資料調査されていた時だと思う。私の実家があった春日井市、そして大阪市東住吉区に投下された模擬原爆へと、なんだか「つながり」のようなものを感じる、台風 7 号直撃の 8 月 15 日だ。

(2023 年 8 月 15 日)

